

Title	西洋宗教思想史 希臘の巻第一, 波多野精一著
Sub Title	
Author	山本, 光郎(Yamamoto, Mitsuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.4 (1923. 11) ,p.131(595)- 132(596)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19231100-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いて研究の上編集せられたので、比較的間違も少い様で、参考となるは記述する迄も無い。

次に本書紹介の序に自分の二三氣附いた諸點を記し、著者の参考に供したいと思ふ。本書は皇族御系圖の一部のみに限りて振り假名を附し、他には少しも附して無いのは如何なる譯か、若し全般に亘りてそれが附せられてあるならば、見る者に非常に便利であると思ふ。又佛門に入られたる諸親王を皆な法親王と記してあるが、これを嚴密に云へば、入道親王と法親王との區別があるから、其の區別をあらはしては如何なるものであらうか、普通に系圖・系譜には其の區別をして居る。又皇族御系圖に至りては思ひの外簡略に過ぎて居るが、もう少し詳記せられたいものである。一二七頁閑院宮孝仁親王の五子に讓仁法親王が記してあるが、同親王は伏見宮兵部卿貞敬親王の王子であつて、天保二年に孝仁親王の「實子」となられたのである。これ等の例は他にもあるが、其の註を附せられたい。當時には眞の子の外に實子・養子・猶子なるものがあり、其の區別もやかましいものであつたから、是等には夫々註を附せられたい。又一三二頁甲の宣仁親王光宮の條に、高松宮を加へられたい。猶一一五頁有栖川宮の始祖好仁親王の王女明子女王に（實池田光政女）とあるは如何なる史料に據られたものであらふか。猶其の外氣附いた點もあるが略して置く。

（武田 勝藏）

西洋宗教思想史 希臘の卷第一

（波多野精一著）
岩波書店發行

本書はツクラテス以前の希臘宗教思想の文獻文化史的研究であつて著名なるローデヤグロートの研究に據つた眞面目なる研究である。然し本書は其の内容から言つて宗教思想史といふよりも寧ろ希臘創始時代及び啓蒙時代の一般的思想史とも言ふべきものである。蓋し此の時代既に希臘神話の統一的意識が次第に自覺しつつあつたが大體に於て未だ各文化意識が相對的統一を保つて居つたものと思ふから價值意識の下に當時の宗教的意識を分明する事は困難であらう。従つて自然本書の示す如く其の範圍も一律に論じ難くなるのは言ふまでもない。然し著者は哲學史研究家であるだけ此の廣範なる領域を涉獵しながら當時の宗教意識を鮮明にせられしは今本書を特に推賞する所以である。

本書は希臘最古の文獻ホメロスの叙事詩の神觀と靈魂觀とより説明を初め抒情詩の發生と共に伴ふ詩人の過渡的思想を説きミントス學派の自然哲學に依つて開始されたる神話的世界觀と哲學的世界觀との對峙を述べ、エレア學派クセノフアネスの新宗教觀と其の傳承的神話に對する大膽なる批評と悲劇詩人達の傳承的信仰や思想に對する鋭き反抗と正義觀を述べ、最後に波斯戰勝後のアテネ文化の繁榮に伴ふ新文化運動と共に伴ふソフィストの事業の目的と特質とを明かにしてゐる。此の點に於て特に裨益する處

金海貝塚發掘調査報告

がある。要するに本書は希臘古代文化意識の發展階次を主として宗教思想上から説明したものであるが、ヴァインデルバンドも言へる如く此の時代既に宗教生活に於ても個人主義運動が充分認め得る事はピタゴラスの宗教運動などに依つても明らかである。然し希臘神話の崩解は理論的意識と倫理的意識とに依つて促進せられたのであつて、傳承的信仰や道徳に對する挑戦は最初は詩人達に依つて一部分に爲されたが、其の最後の大痛棒は哲學其の物に依つて爲されたのである。

『傳承的宗教は詩人のあらゆる努力を以つてしても到底ホメロスによつて美化され爲めに却つて力を得た自然主義や過去の文化状態などの影響を無効ならしむるを許さなかつた。』(同書 二一七頁)

實に希臘神話の世界を没落せしめたるものは哲學的概念的思惟の力であるギリシヤ社會の崩解は哲學其のものに依つて促進せられたのである。

最後に著者が序文に豫告せられし如く本書研究の續行を漸次發表せられん事を望む(一九二三、八、三〇夜)

(山 本 光 郎)

大正九年度古蹟調査報告 第一冊

(朝鮮總督府)

かつて數人の調査發掘によつて學者の注意をひきし慶尙南道金海郡金海面會峴里の貝塚が、濱田、梅原兩氏によつて更に發掘された。本書はその調査報告であつて、第一章遺跡、第二章遺物、第三章考説よりなり、なほ附表として朝鮮石器時代及金石併用期遺物發見要覽、及び附録として松本彦七郎氏の金海貝塚出土獸骨調査報告があり、多數の鮮明なる圖版、挿圖が附せられてゐる。左にその要旨を紹介しよう。

遺物の中石器數はその出土頗る稀であつて、僅かに打製石器と砥石片と各一個にすぎないが、骨角器は頗る豊富であつて、刀子柄、磨琢器、針類、大形針類、大形錐針類、骨筭、骨鏃等があり而してその製作に際しては金屬製利器を使用せる形迹がある。これは狩獵に用ゆる箭鏃が骨を主として石鏃を絶えて見ることなく恰も魏志東夷傳の倭國の俗を記して竹箭、鐵鏃、骨鏃を用ゆると云へるものと對比して、此の貝塚構成民族の文化状態を考察する上に大なる興味をひくのである。土器には陶質黝青色土器、赤色素焼、及び黒褐色素焼の三種があつて、その中黒褐色の柔き土器は最も古拙なる手法に屬し、赤色の稍々柔かなる素焼之に次ぎ、陶質黝青色のものが最も進歩せる製作なる疑を要しないけれども、此の三者が同一層位に於て共存するのみならず、器物の形式も共通し、手法、紋様のごときも類似せる事實は、この各様の土器がひとしく同一時期において製作せられしものなるを證するものであつて、此の場合において何等時代的差違を示すものではな